

秋の夜長の ひとりごと

●昔の名前で出ています

大相撲の世界では、現在の地位を肩書きとしてその人の肩書きとして使用する。

現役力士を引退すると頭に「元」が付き、これまでに立った最高の地位で表現される。

たとえその地位に立ったことがあるのは一場所だけでも「元関脇」「元小結」という呼称が付く。

最高位がその人の報酬・待遇・名誉と連動している相撲界ゆえの呼称だと思う。

思いがけず上位陣が不調でしかも金星まで手に入れて小結に抜擢されたが、大敗して一場所で陥落、その後も怪我に悩まされて幕下まで落ちて、若くして引退（廃業）というような足取りを辿ったとしても「元小結」と呼ばれ続ける。

国会議員の場合も同じで、過去に大臣・副大臣などの地位を経験すると「元 XX 大臣」と言われる。

選挙の度に見る立候補者の経歴には、この表記がずらりと並ぶ。大臣に抜擢されたが、失言や失態で更迭された議員も、「元 XX 大臣」と書かれる。「元 XX 大臣（七日間で退任）」と書かれることはない。

そして、検察や裁判所の世話になったとしても、この呼称は死ぬまで使われる。

あたかも「しかるべきポジションで辣腕を振るったのだ」と言わんばかりの履歴として……。

●でしようからかけてへ

何十年か前までは「天気予報」と言われていたが、近頃は「気象情報」と言うようになった。

「天気予報」という言葉は「天気を予め知らせる」という意味を持ち、「天気予報の外れへの圧力」に抗するために編み出した言葉が「気象情報」ではないかと思う。

気象を予測するために集める情報は、「天気予報」と言われていた時代に比べると抜群に広がっており、情報を処理する能力（IT）も圧倒的に向上している筈である。

多量の情報を駆使して行なうようになったことで、「天気予報」という言葉が「天気予想」「天気予測」という言葉に進化するのなら頷けるのだが、「気象情報」という言葉では「情報を一杯集めたぞ!!」と言っているだけであまり進化を感じないのが、庶民一般の見方だろう。

さて、その昔ラジオで「天気予報」を聴いていると、頻繁に使われていた言葉は「でしよう」だった。

「風が吹くでしよう」「所により小雨が降るでしよう」という表現で民は納得していた。

「~でしよう」の裏にある本音は、「~かもしれません」だったのかもしれない。

「気象情報」をテレビやラジオで聴いていると、頻繁に使われている言葉は「かけて」に変わってきた。

「昼頃にかけて」「関東から東北にかけて」などのように、「予想される時期」や「予想される地域」をぼかして表現するのに使われている。

天候の変化が、瞬間的であったり極地的であったりすることが増えてきたせいなのだろうか。

ラジオを聴きながら、「かけて」という言葉を数えてみたら驚くような回数だった。

●誰が作ったものなのか

京成電鉄の勝田台駅からバスに乗ると三つ目バス停が「勝田新入口」。

その昔、勝田村と言われていた集落への入口を示す地名だったらしい。

車内の音声案内を聞いていると、「勝田新 入口（かつたしん いりぐち）」と聞こえる。「勝田 新入口」と読むのが正しいのだが……、と違和感を抱きながら時が流れた。

近頃はこのシステムに外国語が加わるようになった。運転席の脇の電光表示には英語が加わり、音声案内も日本語と英語になった。

ある日気をつけて表示を見ながら耳を傾けていたら

「次は勝田新 入口です」のあと、「Next stop is Katsutashin Entrance」と言い

電光表示板には「Katsutashin-Entrance」と表示されていた。

このままバスが進んで行くと、「弁天入口」「内山入口」など「入口」という言葉を含むバス停がいくつかあるが、こちらの表示もアナウンスも正しく行なわれている。

「入口」という言葉の前にある単語は名詞で、地名や建造物名であることが多いということを承知している人が、前置の単語「勝田新」を名詞と勘違いした。

「入口」という単語の前に、新旧や方角を示す単語を置くと、「新入口」「旧入口」「東入口」などの言葉ができ、ここでは「勝田」+「新入口」の合成でできた地名なのだということが理解できていない人がこのシステム作りに参加したのではないか。

さらに、日本語の表示と音声案内ができた後で、それを元にして英語に変換されたことが考えられる。この手の誤りは、日本語を熟知していない人間が介在することによって起きると考えられるし、海外の会社に丸投げして作った製品ではないかとも思える。

コンピュータが介在して自動文書作成・自動翻訳・自動音声生成などで作られたものだとしたら、知的レベルがあまり高くないアプリケーションプログラムと言わなければならない。

昨今、人工知能(AI)をもてはやす時代となったが、このようなことが起きないことを願いたい。

そんなこととは関係なく、昨日も今日もバスは走っている。

●COBOLに勝るものはない

夕食が済んだ後、テレビでニュースなどを見て一時間ほどひと休みをする。ひと休みの中で15分位はうつらうつらしてしまうことが多いのだが、「腹の皮が突っ張ると目の皮が弛む」と言われているので、自然現象には逆らわぬことにしている。

20時半頃になると、近所へ散歩に出かける。散歩の時間は30分であったり1時間になったり、日とその時の天候によって様々で、歩くコースも様々だが、街灯が点いている道を選ぶので、概ねいくつかのコースに集約される。

ただ歩いているだけでは面白くないので、周囲の景色や状況を楽しみながら歩くことにしている。

犬の散歩の夫婦や、同じように涼しい時間を選んで歩いている人とすれ違うことが多い。見知らぬ人にも「こんばんは」と声をかけることにしているが、相手の反応は様々なのが面白い。

ガレージの中の車のライトが点きっぱなしの家を見つけると、チャイムを鳴らして教えて上げたり、きれいな花が咲いている家の前で立ち止まって眺めたり、くっきりきれいな月を眺めたり、やることは多い。

小学校の先の暗がりや、丁目の境界を曲がった街灯の下で、いつも猫に出遭う。いずれも猫の方から「ニャー」と声をかけてくる。人恋しい事情でもあるのだろうか、先方から声を変えてくるので、こちらからも猫の鳴声を真似て「ニャー」と返して見た。何となく反応を感じた。

次に出遭った時には少し実験をしてみた。猫語の「ニャー」と日本語の「ニャー」で合い言葉のやりとりがすんだ後で、腰を下ろして目の高さを合わせた上で、猫の目を見つめて長く瞼を閉じる仕草を数度してみた。先方からも同じ動作が帰ってきた。合い言葉が通じて、コミュニケーションの関係が確立してきたようだった。

その次に出遭った時には、次なる実験として「こんばんは」「何してんの?」「涼しくなったね」と日本語で話しかけて見た。すると先方はリラックスした声になり、(意味は解らないが)猫語で返答をくれた。

この日以降下手な擬音(ニャー)は止めて、日本語で話かけることにした。

そんなことを繰り返している内に、道端に転がって腹を見せてリラックスしたポーズを見せるようになってきた。

どうやら、相手の語りかける声の持つ雰囲気を感じているようで、猫語を真似た下手な「ニャー」よりも言語はわからないが、その語り口から感じる表情や感情を感じ取っているように感じた。

Common Business Oriented Language (COBOL) が一番わかりやすいということのようだ。

以上